

田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『aftersun／アフターサン』

[2022年／イギリス・アメリカ／101分] G

監督・脚本：シャーロット・ウェルズ

出演：ポール・メスカル、フランキー・コロロ、
セリア・ロールソン・ホール

プロデューサー：バリー・ジェンキンス、ほか

配給：ハピネットファントム・スタジオ

© Turkish Riviera Run Club Limited, British Broadcasting Corporation, The British Film Institute & Tango 2022

娘と父の あの旅の思い出

人生はたぶん、どの部分を切り取ったとしても、それはかけがえのないひとときなのだ。ただそれに気づくか気づかないかの違いはあるけれど。

11歳の娘ソフィと31歳の父親カラムは、夏休みにトルコの海辺へと旅に出た。父親は家庭用のビデオカメラを買ってきていて、2人は折々に互いを撮影した。

それから20年後、旅をしたときの父親と同じ年齢になったソフィは、ビデオ映像を再生しながら旅の記憶を掘り起こす。そして旅の途次に撮られたふれてばやけた画像を随所に挟みながら、思い出をたどりつつこの作品を紡いだ。この巧みな構成のせいで、何気ない親子の旅の物語に深い陰影がもたらされることとなった。

父と娘はふだんは別々に暮らしている。だから父親はこの旅で娘との親密さを取り戻したい。それに大切なことはこの機会に娘に教えてやりたい。そして娘の方は、父母と一緒に暮らしていたころの思い出を胸に秘めつつ、いまの父親を理解しようと鋭いまなざしを注ぐ。父は母をどう思っているのか。父はどんな日々を暮らしているのか。ソフィとカラムの思いは、旅で出会う物事を通して、ぶつかったり絡まりあったりする。

父親はどうやら、あまり安定した生活を送ってはいない。父の些細な行動や口ぶりから、ソフィはそれを嗅ぎ取る。けれども父が何とか新しい生活を始めようとしていることも、ソフィは敏感に感じている。父の子供時代の逸話から、父の性格の一端を読み取ったりもする。11歳の子どもの洞察力を、監督は旅行中のふとした言動を通して見事に伝えている。

カラムは自制しようとしても、つい苛立ちをあらわにする。一方ソフィは、この年ならではの憧れや好奇心に駆られて、大人になる冒険に踏み出す。それを巡るやりとりもまた、大海原を背景に娘と父の双方の感情や考えを淡々と描きつつ、それぞれの個性をくっきりと浮かび上がらせている点で感動的だ。

31歳になったソフィは、ビデオ映像を見ながら旅の物語を綴るうちに、あることに気づいた。11歳の自分が見ていた父親は、あのときまだまだ若かった。なお成長のさなかにおいて、苦しみを抱えていたのだと。

人はみな欠点も弱さも抱えたまま、人を愛し、時に傷つけながら生きていく。この作品はそういう人たちをすくいあげた、正直で謙虚な人生讃歌になっている。

プロフィール

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。



最後の夏休みを
再生する